

<<書評>>

ルイス・メナンド著 / 野口・那須・石井訳
『メタフィジカル・クラブ: 米国100年の精神史』

岡 崙 修

1

Louisi Menand, *The Metaphysical Club: A Story of Ideas in America* (Farrar, Straus and Giroux, 2001) の全訳である。ハーバード大学で英米文学の教鞭をとるルイス・メナンドの手による本書は、ピューリツァ賞受賞の榮譽に輝いている。5部15章で構成され、本文だけでも450ページ近く、原注と索引も加えれば500ページを超える。

「メタフィジカル・クラブ」と題した本書では、プラグマティズムを生み出したこのクラブのメンバーたちのストーリーが、色彩豊かに展開されている。クラブについては、活動期間が短かったこともあり、今なお不明な点が多いが、そのメンバーの考えをまとめて取り上げた読み応えある書物に仕上がっている。本書では、クラブのリーダー格であったと思われるジョンシー・ライト、法律家であったニコラス・セント・ジョン・グリーン、後に最高裁判所に入ったオリバー・ウェンデル・ホームズ、主著『プラグマティズム』でその名を世に知らしめたウィリアム・ジェイムズ、抜群の能力を持ちながら不遇の生涯を終えたチャールズ・サンダーズ・パース、そして、彼らより20年ほど若く、クラブのメンバーではなかったが、後にプラグマティズムの精神をよく受け継いだジョ

「メタフィジカル・クラブ：米国100年の精神史」

ン・デューイらの考え方が取り上げられている。

神学の支配が色濃く残っていた19世紀半ばすぎに、個性的なこれらのメンバーたちが、それぞれどのような特異なアイデアを持ち、どのような点で見解を異にし、あるいは共にすることができたのか、そこからいかなる形でプラグマティズムが誕生するに到ったのかを、家族間の複雑な葛藤も視野に入れ、当時の社会的背景を辿りつつ、メナンドは巧みなタッチで描き出した。さらに、今日に到るまで、プラグマティズムがアメリカにおいていかなる形で受容され、あるいは拒否されてきたかも示している。

ボストンの一角で開催された「メタフィジカル・クラブ」での議論に端を発し、アメリカ独自の哲学とも言われるようになったプラグマティズムは、さほど長い歴史を有するものではない。しかもそれは、クラブの名とは裏腹に、厄介な形而上学的議論を可能な限り排し、経験と実用性を最大限重んじようとするその姿勢からも、往々にしてアメリカ的な楽観主義を背景に受け取られがちである。近代文明が発展する中で、実用性を重んじたプラグマティズムは、重厚にして陰鬱なイメージを漂わせがちなヨーロッパの哲学の伝統とは対照的で、アメリカの風景によくマッチするものかもしれない。

だが、本書で描かれるプラグマティズム誕生の風景は、そうしたイメージとはかなり違っている。北軍の兵士として南北戦争に加わったホームズの若き時代から話を始め、その後一世紀に亙るアメリカの精神史と重ね合わせる形で、プラグマティズムの誕生と変遷を辿るメナンドの描写には、楽観主義の色合いは見られない。

メナンドは言う。「思想は決してイデオロギー——現状の正当化もしくは否認に向けられた超越的命法——に転化してはならないという信念は、彼ら〔プラグマティスト〕のメッセージの核心である。」(p.3)

正義や真理を巡って、人々は容易に絶対主義者・教条主義者と化し、その言い分とは裏腹に、平和主義者がのっぴきならない対立へと人々を

引きずり込んでしまう。「メタフィジカル・クラブ」におけるメンバーたちの議論は、そうしたことへの反省を踏まえて展開されたもので、これがその後、アメリカの知的土壌の底流をなす形で引き継がれ、今日のモダンなライフ・スタイルを促すことになったとメナンドは言う。

本書の内容を要約する形で、プロローグには次のように述べられている。

〔ホームズ、ジェイムズ、パース、デューイ〕は、きわめて特徴的なパーソナリティを有し、またお互いの意見がつねに一致していたというわけでもなかったが、経歴に関しては重なり合う部分が多く、米国思想を近代世界に参入させる上で、他のどのグループよりも大きな役割を果たしていた。…彼らの思想は、教育、民主主義、自由、正義、そして寛容についての米国人の考え方を変え…私たちは今もなお、大部分は、彼らの力で築かれた場所に暮らしているのである。…

〔彼らは〕思想は「向こう側で」発見されるのを待っているものではなく、自分たちが内属するこの世界に取り組むために工夫して作り出す…道具である、と考えていた。彼らは、思想はもろもろの個人ではなく、もろもろの個人からなるもろもろの集団によって生み出されるものであると、すなわち思想とは社会性をともなうものであると信じていたし、思想はそれ自体に固有の内的論理にしたがって発展するわけではなく、細菌のように、人間という媒体と環境に依存しているものであると信じていた。さらに彼らは、思想とは特定の、再現不可能な環境に対する暫定的な反応の試みであり、その意味で自分たちの死活の鍵を握るのは、首尾一貫性ではなく、柔軟さに他ならないのだという信念を共有していた。

クラブのメンバーの一人で、プラグマティズム法学の生みの親であったオリバー・ウェンデル・ホームズの苦い体験から、本書のストーリーは始まる。

2

南北戦争を現代の眼で見る場合、それは、奴隷制を死守しようとした南部に対し、その廃止を求める北部との対立が高じた結果の戦いと思われがちである。だが、実情は決してそうした善と悪との戦いではなかった。そもそも、北部がいくら奴隷制に反対であったにせよ、彼ら自身が存亡の瀬戸際に立たされたわけではない以上、戦争に訴えてまで奴隷制を巡る対立に決着をつけようとしたと考えることは、甚だ非現実的である。戦争に到った真の原因は必ずしも明確ではないとしても、本書に引用されているグラント將軍の次の言葉に、この戦いの勃発に到るまでの複雑な事情を垣間見ることができる。

「大半の北部人は奴隷制について、それが自分たちに強要されでもしないかぎり、とりたてて争うつもりはなかった。だが彼らは、この制度を守るためにわざわざ南部の警察の役割を演じようとも思わなかった。」(p.14) 奴隷制とは距離を置いて眺めていた北部が、時が経つうちに、南部の警察役まで演じる羽目に陥り、これが北部にとって座視できない問題になったことをグラントは示唆している。

19世紀のアメリカにおける奴隷制廃止論は、1830-40年代になると北部人の中に急進主義者を生むようになる。彼らは、自らの宗教的動機に支配され、奴隷制を廃止させなければキリスト教徒としての自らの魂の救済を得られないと考える傾向が強かった。それは、社会制度としての奴隷制の是非を問うというより、自らの内面的な信仰問題を核に据え、そこから奴隷制廃止を唱えていた。

しかし、当初はこの急進派がまだ少数派に留まっていたため、北部人の大半は、奴隷制を巡りさほど本気で争うつもりはなかった。南部が奴隷制廃止を容易に受け容れないことは明らかであったし、イギリスを凌

ぐ綿花生産でアメリカを潤すようになった南部に、当時の北部の製造業は経済面で依存せざるを得なかったため、奴隷制廃止を強要し、南部が連邦から離脱するようなことになれば、由々しい事態になることが目に見えていたからである。おまけに、北部人にも奴隷解放により黒人を白人と対等視する意図などなかった。こうした状況下にあったため、当初、北部人の多くが、周囲で奴隷制廃止を唱える急進主義者を敬遠し、彼らを連邦の分裂をもたらしかねない厄介者と考えていた。

南北戦争以前、連邦は、今とは比べものにならないほど弱体であったため、神聖な財産権の対象とされていた奴隷の解放を強要することなど、とてもできなかった。連邦がこの状態で、北部には奴隷制が存在していないのであれば、北部としては、奴隷問題の責任をひとえに南部に負わせておけば、事足りたわけである。

だが、時の進行とともに、事態は次第に対立の様相を深めてゆく。奴隷制廃止の急進主義者が連邦直轄地のコロンビア特別区で奴隷制を廃止せよとする請願を連邦議会に提出すると、南部議員がこれに憤慨し、北部選出の民主党議員と手を組んで、この請願を棚上げにする措置をとった。すると、今度はこの措置に北部が憤慨し、それまで奴隷制廃止に関しては静観の構えを維持してきた北部人までが、南部に対し怒りを募らせる結果となった。

権利章典により請願権を保障した合衆国憲法の下で行われたこの棚上げ措置を、北部人は、連邦により北部の権利が侵害されたものと受け取った。その上、南部における奴隷制維持は、その煽りで、北部人の言論・出版の自由をも脅かすようになった。南部人は、北部から来た廃止論者の命を脅かすだけでなく、隣接する北部諸州にまで暴徒が侵入し、奴隷制廃止を唱える新聞社を焼き打ちするに及んだ。

こうした事態のエスカレートに直面した北部人の多くが、奴隷制廃止を巡り、南部が北部の自由をも脅かし始めたと考えるようになった。もはや、それは奴隷問題ではなくなり、南北における自由人どうしの争い

へと転じていた。このため、北部も、それまでのように静観の構えを保つわけに行かなくなり、双方の緊張は否応なしに高まることになった。

こうした経過を辿ってみれば、この問題が、奴隷解放に熱を入れる北部の善と、奴隷制に固執する南部の悪との衝突ではないことが分かる。南部が奴隷制度に死活的重要性を持っていただけではなく、北部も南部への経済依存を安易に断ち切ることなどとてもできなかった。だが、これが次第に南北における自由人の間での感情的対立へとエスカレートしてゆくにつれ、奴隷自体はそっちのけにされ、開戦前になると、ほとんどのアメリカ人が、もはや連邦制の維持と奴隷解放は両立できないと考えるようになり、その決着を戦争に求めるようになった。

今日、合衆国憲法の中でも最重要条項とされる第十四修正は、南北戦争後に南部再建条項の一つとして導入されたものである。これにより、連邦の権限が拡大され、それまで州が優位にあった制度上の力関係は逆転することになる。だが、それまで、南部では連邦は州の代理人に過ぎないとする主張が根強くなされていた。そもそも、13州の独立時には連邦など存在せず、その後の合衆国憲法制定により連邦が誕生したこともあり、とりわけ南部では、連邦は州の利益になるよう行動すべきであり、その利益に反する行動は許されないという主張もなされていた。この考えによれば、西に向かい領土拡張を続ける当時のアメリカにおいて、南部人は、その財産たる奴隷を、新たに連邦に加盟するいかなる場所に持ち込むことも許されるべきであって、連邦にそれを阻止する権限などないことになる。

こうした中で、1850年には南北間で妥協策が交わされた。だが、これにより事態はさらに悪くなった。それは、これによりコロンビア特別区での奴隷売買は禁止されることになったが、その交換条件として、連邦議会が逃亡奴隷法をさらに強化することになったからである。その結果、北部人は、逃亡奴隷の拘束にまで協力せざるを得なくなった。かくして、北部は南部の警察役まで演じさせられるという屈辱的な状況に

陥った。

この緊張の高まりの中で、1857年、連邦最高裁は、かの「ドレッド・スコット」事件に判決を下した。これが、悪い事態にさらなる追い打ちをかけた。最高裁は、原告のスコットは奴隷の身分であるため、裁判に訴える資格はないとし、スコット側の言い分を退けた。これには北部人がいたく憤慨した。それは、容赦なく北部への圧力を強める南部への憤りが高まる中で、この判決は南部の言い分をほぼそのまま容認しに等しいものとされ、これを以って、北部は最高裁までが南部の軍門に屈したと受け取ったためである。

こうした、双方の対立はもはや極限にまでエスカレートし、これに決着をつけるとすれば、戦争しかないという事態に到った。そしてリンカーンが大統領に選出されると、南部は次々と連邦を脱退し始め、ついには戦いの火ぶたが切って落とされることになる。

多くの北部人が連邦の維持を望んでいた当初は、奴隷制の問題は、南北間の均衡問題に留まっており、まだ道德問題とはなっていなかった。ところが、双方の緊張が高まった結果、奴隷制の問題は道德問題と化し、奴隷制は墮落した制度に他ならないという見方が広がりはじめた(p.31)。そして、南北双方が感情的にエスカレートした結果、終いには、サムター要塞への砲撃も重なり、「一夜のうちに、誰一人として擁護してこなかった解決策が、全員の賛同する解決策となった。」(p.35)

内面における変化が徐々に社会の雰囲気を変え、それがさらに対立を煽る悪循環を繰り返し、ついには南北の諸州が戦争に突入することで米国内戦へと発展し、62万人という夥しい数の戦死者を出す結果を招いた。これこそ、思想をイデオロギーへと転化させてしまった結果である。

奴隷廃止論者のラルフ・ウォード・エマーソンに傾倒していたホーム

『メタフィジカル・クラブ：米国100年の精神史』

ズは、この戦いを己の道徳的義務として受け容れ、北軍兵士として戦場に赴いた。彼は、凄まじい戦闘に直面し、かろうじて命こそ落としはしなかったものの、致命的とも言える傷を繰り返しを負った結果、運よく生還できはしたものの、終生、杖を手放すことができなかつたとされる。

この戦いを通し、ホームズは、自らが信じていた奴隷廃止論が、人々を殺し合いにまで到らしめる類の優越的な固定観念であったことを悟らされた、とメナンドは見る (p.65)。この苦い体験が、ホームズから信念そのものに対する信念を奪い去り (p.7)、これが後にクラブでの議論を通じ、彼をプラグマティズムに到らしめることになった。

対象が自由であれ財産であれ、その信念が度を超えて絶対主義的・教条主義的なものになれば、終いには守るべき自由も財産も台無しとなる結果を招く。ホームズがプラグマティズムを唱えた背景には、人は誰も正しいと考えるものの下に武器を手にしうると考え、彼が精神的権威や原理を居丈高に振り回すことを控える必要性を痛感したためだとメナンドは見ている (pp.66-67)。

3

このような絶対主義的・教条主義的な姿勢は、南北戦争後のアメリカにおいても、その姿を変えつつ随所に顔を出すことになる。19世紀末には、これが契約自由の原則を巡り、「実体的デュープロセス論」を活用したレッセ・フェールの経済思想となって表れる。この問題が「ロックナー事件」として連邦最高裁に持ち込まれた際に、最高裁裁判官であったホームズは、ペッカムの筆になる多数意見に対し有名な反対意見を展開し、合衆国憲法第十四修正はスペンサーの思想を擁護するためのものではないと辛辣に言い放っている。これは、第十四修正を足がかりに、契約自由の原則を絶対化しようとした最高裁の姿勢に、ホームズが正面から異を唱えたプラグマティズムの表れである。スティーブン・フィー

ルドの考案と言われる「実体的デュープロセス論」を利用し、契約自由の原則を憲法により擁護した「ロックナー事件」判決は、1937年の「ウェスト・コースト・ホテル事件」判決で覆され、その先例としての役目を終える。

ホームズは、数はさほど多くはなかったにせよ、有名な反対意見を残し、「偉大なる反対論者（Great Dissenter）」という異名を得ている。ホームズの書いたオピニオンの多くに、どこかシニカルなトーンが滲み出ているのは、それがホームズ自らの苦い体験の表れであるとメナンドはいう。

ホームズは、法学者として初期に著した論文の中で、裁判官は三段論法を用いる以前に結論に達していると述べた。これらの見方が後にプラグマティズム法学として開花し、さらにそれは1920年代後半にリアリズム法学へと受け継がれて行く。F・ルーズベルトのニューディール政策への同調者がその多くを占めたリアリズム法学は、一般には若きホームズの洞察を受け継いだものと受け取られている。だがメナンドは、「エピローグ」において、リアリストたちの主張は、すでにホームズの意図から離れていたと述べている。（p.439）

第二次世界大戦後になると、米ソ冷戦の勃発とともに、再び原理を巡る戦いが燃え上がったことに伴い、アメリカの知的土壌は変質し、プラグマティズムの教訓からまた遠のくことになったとメナンドはいう。1960年代には、市民的自由を擁護する動きが、個人の自由を不可譲の権利として位置づける自然権思想を基礎として展開される。さらに1965年の「グリスウォルド事件」においては、憲法上のプライバシー権を巡り、かつて契約自由の原則を憲法上絶対化しようとし、革新主義の立場から厳しく批判されたはずの「実体的デュープロセス論」が、権利章典の「ペナンプラー」という装いに姿を変え、再び顔を出すことになった。これがその後、女性の中絶権を巡って争われた70年代の「ロー対ウェイド事件」においても活用され、憲法上のプライバシー権の概念

「メタフィジカル・クラブ：米100年の精神史」

を通じ、リベラル派に勝利をもたらすことになった。

これらの点に注目し第二次大戦後の流れを見れば、メナンドがこれをなぜプラグマティズムの知的土壌の変質と言ったのか、その意味の一端が分かる。19世紀末から20世紀初めにかけての財産権、経済の自由の擁護論のみならず、第二次大戦後の個人の自由、自己決定権、プライバシー権の擁護論においても、いずれも思想をイデオロギーに転じかねない危うい要素をはらんでおり、ホームズがプラグマティストとして「ロックナー事件」で反対意見を述べたように、60年以後の事件においても、彼なら多数意見に対し異議を唱えたはずだとメナンドは見ている。「米国民は冷戦期を通じて、寛容と自由との価値を否定はしなかったが、彼らはそれらの価値をプラグマティックな土壌とは全く別の場所の移植したのである。」(p.442)

「メタフィジカル・クラブ」は、南北戦争後のボストンで、わずか数年間という短期のうちに活動を終えた。このクラブは、極めて地味な会合であったろうし、今でも多くの人にその名は知られず、クラブの動きの全貌は必ずしも明らかになってはいない。

西洋哲学の伝統が、ギリシャ以来の伝統を受け継ぎ、誤ることのない知識たるエピステーメを探求することに特徴の一つを有してきたこともあり、哲学は常に普遍的真理の探究を目指してやまない。19世紀のアメリカにおいては、プロテスタント神学と結び付くことにより、近代科学の探求が自然神学の牙城となっていた。それは極めて実証主義的な特徴を有し、ベーコン主義の帰納科学と極めて相性が良い関係にあった。このため、一見したところ、近代の実証科学の様相を示しながら、その根底には、聖書に記された神の揺るぎなき言葉の証明という神学的動機が息づいていた。

こうした知的状況を背景に、ダーウィンの進化論から多大の刺激を受けたプラグマティズムにおいては、西洋哲学の伝統たるエピステーメの

探究においてさえ、生物にとってのサバイバルという目的が暗黙のうち
に先行することを抜きにして、真理を語ることなどできないと考え、ジェ
イムズは「真理＝サバイバルにとっての有用性」というプラグマティ
ズム特有の真理観を展開した。

ライト、グリーン、ホームズ、ジェイムズ、パース、デューイらのプ
ラグマティストは、南北戦争後の時代を背景としてそれぞれ違った人生
を歩む中で、各人の思想をプラグマティズムというアイデアに込めて形
成した。本書においては、南北戦争以後の急速な近代化に向かう変化の
中で、無数に上る資料を丹念に渉猟しながら、その形成と展開のプロセ
スが描き出されている。さらに、神学から科学へ、決定論から非決定論
へ、農業社会から産業社会へ、個人主義とレッセ・フェール経済思想か
ら、革新主義と官僚主義へと向かう大規模な変化、19世紀末における
大量の移民の流入に伴う優生学的議論なども交えながら、アメリカにお
ける精神史という一本の軸を巡り、プラグマティズムの辿った足跡が大
規模なスケールで展開されている。

プラグマティズムというアメリカ独自の思想を、それを生み出す母体
となった「メタフィジカル・クラブ」の誕生から100年の歴史を辿りな
がら描き出そうとした本書は、プラグマティズム研究の貴重な労作であ
る。

- 1 以上は、マイケル・ベネディクト/常本訳「アメリカ憲法史」第7章（北大
出版）、メアリー・ベス・ノートン他/本田監修「アメリカの歴史」③（三省堂）
による。